

第2章 イスラーム教下のイエメン

ー イスラーム初期におけるイエメン（その2） ー

そしてムズハジュからは、15人の男達から成るルハウイー族の代表団が到着した。彼等はアッラーの使徒に贈り物をしたが、その中にはアルミルワーフと名付けられた一頭の馬があり、彼等が使徒の前で走らせたところ、使徒はそれに魅了され彼らと長い間話した。そして彼等はイスラーム教に帰依し、信仰上の義務を学んだ。聖なる使徒は彼等に、諸代表団に与えるのと同様に（彼等の内最も位の高い者に12ウキヤの金、最も低い者には5ウキヤの金を）報酬として与えた。それから彼等は自分達の国へと戻って行った。

ムズハジュからはまたアルナファアの代表団も到着した。そしてキンダからはアルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーの代表団が、最高の飾り付けをし、最も美しい装束を身につけた80人の騎馬団で来た。彼等が帰ることを決意した時、使徒は彼等に対して報酬として、馬の乗り手各々について10ウキヤの金を与えた。アルアシュアスに対しては12ウキヤの金を与えた。

これと同様にキンダ内陸部にあるトゥジープの13人の男達から成る代表団（注:1）が到着した。彼等は自分達の財産を施し（サダカ）として持って来たので、使徒は彼等を嘉し、彼等を歓迎し、彼等の地位に敬意を表し、そして常の報酬として与えるところのものより多いものを彼等に与えた。

（注：1）「イスラーム黎明期のイエメン人達」 Dr. ナッザール・アブド・アッラティーフ・ハディーシー著 P.101

そしてキンダの代表団と共にハドラマウトの王達の元から、バヌー・ラビーアがマディーナに到着し、イスラームへ改宗した。

またハドラマウトからはアルスドウフの代表団が10数人の男性でやって来た。彼等は神の使徒のモスクで座っていたが、「アッサラーム・アライクム（貴方達の上に平安があるように）」と挨拶をしなかったので、聖なる使徒は彼等に言った「貴方達はムスリムですか？」彼等は言った「はい」と。それに対し使徒は言った「では何故挨拶をしないのですか？」すると彼等は言った「貴方の上に平安あれ、神の慈悲と祝福があらんことを」。使徒は言った「貴方達の上に平安あれ、お座りなさい」と。彼等は座り、祈りの時刻について使徒に尋ねたので、彼は彼等に知らせてやった。

ハドラマウトから聖なる使徒の元に、彼の地の族長であり、王であるワーイル・ブン・ハジャルが来た。預言者は彼の教友達に、彼が到着する数日前にその到来を伝えて、次の様に言っている。「ハドラマウトの遠来の地から汝達の元に、ワーイル・ブン・ハジャルが恭順

の意を表し、(イスラーム教を)求めてやって来る。使徒は、ワーイルがマディーナを立ち去る折りに、書簡を書き彼に携えさせている。その中に次の如く記載されていた。「これは預言者ムハンマドからハドラマウトの族長のワーイル・ブン・ハジャルへの書簡である。正に汝はイスラームに帰依した。我は汝の為に諸領地と砦のうち、汝の手中に有るものを安堵した。但しそれらの10毎に1が召し上げられる。その事を公正の所有者である神が見ておられる。また彼の地で宗教を執り行う者達に対して圧政を行ってはならぬ、と汝に対して言いおく。預言者、彼の上に祝福と平安あれ、そしてその上に勝利があらんことを」。

預言者はワーイル・ブン・ハジャルの到来の少し前に、ムアーウィーアに対して、彼を出迎え、そしてマディーナ郊外の荒野(Alhurrat/地名か?)に準備させてあった住居に彼を泊めるように命じていた。また人々に彼の到来に対して喜びを表現して集まるよう、呼び掛けるように、また人々に彼を歓待するよう命じた。

「アッタバカート」(注:2)の中でイブン・サイドは物語を完結し、次の様に述べている。

「ムアーウィーアはその荒野へと彼(ワーイル)の供として行った折、ムアーウィーアは歩き、ワーイルは馬に乗っていた。ムアーウィーアは彼に語りながら言った『私に貴方のサンダルを投げて下さい、それで暑さから身を守りたいのです』。ワーイルは彼に言った。『イエメンの人々には、庶民が王のサンダルを履いていた等とは伝わることはあるまい』。しばらくしてムアーウィーアは彼に言った『私の直ぐ後ろに付いて来て下さい』ワーイルは彼に言った。『私は諸王達の付き人達の出自ではないが、もし汝が望むのであれば、私の牝駱駝を(汝の為に)貸そう。そしてその影を歩くがよい』。

ムアーウィーアは預言者の所に来て、彼とワーイルの間に交わされた話を伝えた。預言者は『正に彼の内にはジャーヒリーヤ(イスラーム以前の無明時代)の傲慢さがある』と語った。」

(注:2) 「人々の積み重なり」(預言者の教友達と従った人々の伝記)第1巻 P.287

ハドラマウトから、また同様に聖なる使徒の元ヘターリク・ブン・スワイド・アルハドラミーがやって来て、治療のために絞って飲んでいる彼等の土地の葡萄について、使徒に尋ねた。それに対して預言者は「それは治療ではなく、むしろ病である」と語った。

またアブー・ワハブ・アジャイシャーニーが神の使徒に同様の事を尋ねた。それは彼がジャイシャーンの使節団の長として、使徒の元へやって来た時のことであった。その質問とは彼等の飲み物のことであったが、蜂蜜からのものをワイン、そして麦からのものを「ミズル」(ビール)と名付けていたが、沢山飲むと酔うものであった。それに対し使徒は「多くを飲んで酔うものは、その少量でも禁じられたものである」と語った。また次の様にも言った「酔いを催すものは、どんな物も禁忌である」。

またマフラからはマフリー・ブン・アルアビードを代表とする使節がやって来て、彼等は使徒の手によってイスラーム教徒となった。そして使徒は彼等のために以下のことを書いた。「慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名によって。この書簡は神の使徒であるムハンマドから、マフラにおける神を信じる者達の長としてマフリー・ブン・アルアビースに宛てたものである。彼等に礼拝所設立の義務を課し、イスラームを他の宗教と換えた者に対しては戦闘を行うこととなり、一方それを信じる者に対しては、アッラーと彼の使徒の加護があるう」。

ナジュラーンについては、そこにはキリスト教徒と多神教徒が存在し、そのため彼等に対する使徒の政策は異なっていた。ナジュラーンのキリスト教徒達は神の使徒を14人で訪問した。その中には部族の長であり、意見や協議のまとめ役であるアルアーケブやこの旅行や会衆の管理役アッサイド、そして学校教育の管理者であるアブー・アルハーリス司祭がいた。聖なる使徒は、ジズヤ（人頭税）を支払うことで、彼等が自分達の宗教に留まることを認めた。

使徒がナジュラーンのキリスト教徒と結んだ和解は次のことを示している（注：3）
彼等に対し、自治により近い立場を認めるというものだった。その証拠には、次のものがあった。即ち農業、鉱業、工業、商業からの利益は彼等に残す。奴隷も彼等の元に残す。またナジュラーン及び周辺地域の行政を認める。財産及び彼等自身を安堵する。彼等の宗教実践の権利を認める。彼等の無知なる血統を絶やす事をしない。集会を開いてはいけない。教会税を取らない。彼等の土地で馬に乗ってはいけない、とある。

（注：3）「イスラーム黎明期のイエメン人達」Dr. .ナッザール・アブド・アッラティーフ・ハディーシー著 P.103

また一方で聖なる使徒は、彼等に二つの時期、最初がラジャブ月に、2番目にサファル月に下記の物を納める事を彼等に課した。即ち、2000の宗教的礼服とその各々に1ウキアの銀を付けること。そして預言者の使者達の食糧及び彼等に20日にわたって娯楽を提供すること。そしてイエメンのイスラーム教徒達が策略や反乱に晒された場合は、ナジュラーンの人々は30の鎧と30の馬と30の駱駝でもって彼等を支えねばならず、またそれ以上過剰なものは禁止された。和平はナジュラーンの人々が誠実で行い正しい状態にいる、と言う条件付きであり、また和平は、アッラーが命令（啓示）を下すまでの一時的なものであった。聖なる使徒は、彼の（布教の）終章において彼の後継者のために、彼等をナジュラーンからそしてアラビア半島から追い出す準備をしていた。そしてそれを行ったのが第2代カリフのオマルであった。

ナジュラーンの多神教徒については、アッラーの使徒は彼等をイスラームに呼び入れるために、ハーリド・ブン・アルワリードを送り、3日間の猶予を与え、（改宗せずば）戦うで

あろうと告げたので、彼等は戦うこと無く改宗した。ハーリド・ブン・アルワリードは彼等の元で、信仰について教えるために少しの間留まっていたが、それからバヌー・アブドゥルマダーン・ブン・アルハーリス・ブン・カアブの一族から送られて来た代表団を伴って、アッラーの使徒の元へ帰って来た。

(その代表団の中には) ズー・アルギッサ・カイス・ブン・アルヒッシーン・ブン・ヤジードがいた。彼等全員は使徒の前でイスラームを認めた。そこで使徒は、カイス・ブン・アルヒッシーンを彼等の首長として任命し、12ウキヤの報酬を彼に与え、残りの者には各々10ウキヤずつ与えた。そして彼等と共にアマル・ブン・ハズム・アルアンサーリーを遣わした。彼はクルアーンと信仰におけるイスラーム法の知識を教え、善行を人々に伝え、彼等にそれを命じた。彼はアッラーが命じた様に真理を得、虐待を禁じた。

そして誰であろうが、清浄であるか、或いはなつめ椰子の枝、もしくはそれ以外の啓示を受けた物質でもってなければ、クルアーンに触れてはならなかった。そして人々に彼等の有する権利、或いは彼等に課せられたものについて知らせた。人々に対し、圧政の禁止を厳しくし、真理については人々に優しくした。神は圧政を嫌い、それを禁ずるからである。そして義務について彼等に教え、イスラーム教徒達にはザカート（喜捨）、異教徒達にはジズヤ（人頭税）を課して、それをイスラーム法に沿って使用した。

ナジュラーンの代表団は背が高く、髭が豊かであった。使徒が彼等を見た時、次の様に言った。「このインド人みたいな男達は誰なのだ？」

またアラビア半島の北部のガーフィク、サマーラ、ガーミドへと移住していったイエメン人達であったアズド・アッサラー族の諸代表団が、聖なる使徒を訪れている。そして彼等は自らのイスラーム教への改宗を宣言し、使徒に対して部族の忠誠を誓った。

部族を代表しない遊牧民達と個人の到来については、その数は非常に多く、ここではそれに対して頁を割けないが、代表的なものには次の様な者達がいた。

バヌー・アウフ・ブン・アディー族のアルアビヤド・ブン・ハンマール・ブン・ムルタッド。そしてハーシド地方のワーディアのバヌー・ムアンマル族のアブラハ・ブン・シャルハビール・ブン・アブラハ・アルアスバヒーとアブドッラー・ブン・アーミル。そしてアルハブ地方のダマーム・ブン・ザイド・ブン・ハーリフとアブー・ラハム・ブン・ムトアム・ブン・アルムアンマル。そしてその他の者達がいた。

使徒はアルアビヤド・ブン・ハンマールに対して、マアリブ地方の塩（の取引）を止めさせた。アルアクラウ・ブン・ハービスは使徒に言った。「ジャーヒリーア（イスラーム以前）の時代に私はこの塩を扱っていました。それは甘い水みたいで、それから出るものを扱う者は誰でも、そこから生み出されるものに捕らわれてしまいます」。

それから使徒はアルアビヤドを出迎えた。アルアビヤドは使徒に「アッラーの使徒よ、貴方は塩を私からのサダカ（任意喜捨）とする条件で、私を（塩から）離間させ給いました」

と言った。アルアビヤド・ブン・ハンマールはジヤード家首長国の分派であったアルマアーフイルの諸王バヌー・アルキランディー族の祖父である。

イエメンにおいて生まれたペルシャ系民族も、イスラームの初期に改宗した者達ではなかったにせよ、イスラームへの改宗と入信の呼び掛けに従うことに、遅れることはなかった。諸出典資料には、これらペルシャ系民族の首長、バーザーン・ブン・アルティージャーンがイスラームに改宗したことが言及されている。

その記述によれば、この人物はペルシャ系で、サヌアールの総督であった。以下この人物について略述しておこう。「キスラーなる男（ペルシャ王）は、ヘジラ暦7年、聖なる使徒ムハンマドによるイスラームの布教の呼び掛けが到達した折に、前述のイエメン総督のバーザーンに対し、ヒジャーズへ屈強な男2人を派遣するように要請した。使徒に関する情報を得るためである。バーザーンから書簡を託された2人は、使徒にその書簡を手渡した。使徒はこの2人に翌日まで留まることを命じた。翌日になって、再び使徒の所に赴いた2人は、キスラーが息子のシーラワイヒの手で殺害された事を知らされた。ヘジラ暦7年ジュマード・アルウラー（第5番目）月の火曜の夜のことであった。

2人はバーザーンの元に戻り、使徒から聴いた報せを伝えた。その報せが本当だと分かることとバーザーンは一族同胞と揃って改宗した。使徒によりバーザーンはイエメンでの職務を任された。こうしてバーザーンはヘジラ暦10年に亡くなるまで職務を遂行したのである。

尚、この一件（注:4）は、サーサーン朝ペルシャ時代に書かれた物語に登場しており、これによってキスラーが西暦628年（ヘジラ暦7年）に殺害されたことが、史実であると分かるのである。

（注:4）「イスラーム下のイエメン」 Dr. イサーム・アッディーン・アブドアルウーフ・アルファキー著 P. 25

イスラーム初期の時代の人々（注:5）の中には、初代カリフのアブー・バクル・アッシディークの時代に、サヌアールのイマームであったアブド・アルラハマーン・ブン・バズラジュなる人物がいた。同じく彼の姉妹のウンム・サアド・イブナ・バズラジュと彼の妻ダーザワイヒ、その他何人かが、ワブル・ブン・ユハンナスによってイスラームに改宗している。このワブルは、聖なる使徒がアバーン・ブン・サイード・ブン・アルアースと共にサヌアールへ派遣した人物である。

（注:5）「サヌアール史」（第2版）アッラージー著 P. 194

そして聖なる使徒は、派遣されて来た者達を集団で、或いは個人で、マディーナの彼のモスクにおいて迎えた。そして彼等を歓待し、彼等の国の中の土地を分け与えた。そして彼等に対し、その所有する物や影響下にあるものを安堵し、その事について彼は誓約を書いた。

また同様に使徒は彼等の長老達を迎えた。その折り長老達は、彼を称賛と尊敬に値する、と見做していたのであった。そして彼等のうち数人が使徒に近づき、彼に対する敬意や尊敬を大袈裟に表しながら、使徒のガウンを飾り立てた。彼等の中には、前に述べたアルアビヤド・ブン・ハンマールやアルハリス・ブン・アブドカッラール・アルヒムヤリーそしてアブラハ・ブン・シャルハビールやジャリール・ブン・アブドッラー・アルバジュリーとワイル・ブン・ハジャル・アルハダラミー等があり、彼等全ては、我々が既に知った様に、異なった時期に代表団としてやって来たのだった。

この様にイエメン人達は戦ったり強制されたりすること無く、素直にイスラームの呼び掛けに応えた。何故ならユダヤの神の宗教やキリストの神の宗教に対する彼等の理性の成熟や認識、知識、信仰の安寧が、彼等に（イスラーム教を受け入れる）準備をさせていたからであった。これら2つの宗教は、それらを信仰する者達の変節以前には同一の宗教であり、その根本や目的において1つの神の宗教であった。またペルシャ人達の統治の下にイエメンが服従していた折りに、イスラームがもたらされたのだが、彼等の偶像崇拜から逃れるため、そしてまた聖なる使徒が使者を送った折りに存在していたイエメンの様々な権威による殺し合いや戦闘からも離脱するためであった。

そしてイスラームはこの様な紛争の全てを終わらせた。そして無秩序に規制を敷き、イエメンをイスラームの旗の元に統一した。

また同様にイエメン人達はカリフのアブー・バクルとオマルの時代のみならず、ウマイヤ朝とアッバース朝の時代にも、イスラームを広める為のジハード（聖戦）の呼び掛けに応じた。それについては後に知ることとなる。

聖なる使徒の時代におけるイエメンの総督達 (ヘジラ暦6～10年、西暦615年～619年)

ヘジラ暦10年にイエメンの総督のバーザーンが亡くなった時、イエメンは聖なる使徒によって以下の様に3州に分割されていた。

第1は、サヌアール州及びその周辺地区：シャハル・ブン・バーザーンに管理が委任されていた。

第2に、ジュンド州及びその周辺地区：ムアーズ・ブン・ジャバルに管理が委任されていた。その他彼にはイエメン全土の統括権が委任されていた。彼の知識の豊富さと、イスラーム法に対する深い理解度、それに神を畏怖する心が強かった故のことであった。

第3は、ハダラマウト州及びその周辺地区：アルムハージル・ブン・ウマウィーヤ・アルマフズミーに管理が委任されたが、彼はハダラマウトに赴任する前に、メディーナで病氣

になったので、彼に代わりハダラマウトのキンダ県の県長のズィヤード・ブン・ラビード・アルバヤーディーが使徒に命じられて、上記の役目に就いた。

ジャウフ東方のハッブ地方で「黒のウンシー（アルアスワド・アルウンシー）」として知られたアブハラ・ブン・カアブ・ブン・アウフ・アルウンシーが反乱を起こした、ハド라마ウトとサヌアーを手中におさめ、サヌアー総督のシャハル・ブン・バーザーンを殺害した。

彼が殺された時、聖なる使徒はサヌアーにその地の総督としてイッバーン・ブン・サイード・ブン・アルアース・ブン・ウマウィーヤ・ブン・アブド・シャムスを派遣し、サヌアーでバーザーンの庭に大モスクを建築することと、キブラ（礼拝の方角）をサヌアーの北の郊外にあるディーン山に設置することを命じた。そこで大モスクを建立したのは、彼なのか、或いはイエメンに彼と同行したワブル・ブン・ヤフニスなのか、前述したファルワ・ブン・マシーク・アルムラーディーなのか言い伝えは様々であるが、「恐らくその大モスクを建てたのは、ファルワ・ブン・マシーク・アルムラーディーで、それと一緒に彼はアルジャバーナの後方にファルワモスクとして知られた自分のモスクを建立した」とアッラージーは自らの著書「サヌアーの歴史」の中で見解を述べている。（注:6）そしてアッラージーは「ムアーズが大モスクの建立を遂行後、その完成のためにファルワを自分の代理とし、ジュンドに向けてサヌアーを離れた」と述べている。

（注:6）上述書 P. 519 大モスクに関する追記を述べている。今日それは大サヌアー・モスクとして知られているものであるが、その増築部の一部は、ウマイヤ朝第6代カリフであるアルワリード・ブン・アブドアルマリクのサヌアー総督のアイユーブ・ブン・ヤヒヤー・アッサカフィーに命令したものであり、この増築部はキブラ（礼拝方向）に対するものであり、別の増築部分は首長のムハンマド・ブン・ヤアフィル・アルハワーライのものである。恐らくそれは東の方角であろう。また同様に、アイユーブ朝時代の首長のワルドサールがモスクの二つのミナレットを建立している。

前述の者達以外でイエメンの各地の統治者は次の者達である。ナジュラーンにはアマル・ブン・ハザム・アルアンサーリーそしてナジュラーンとザビードの地にはハーリド・ブン・サイード・ブン・アルアース、またハムダーンにはアーミル・ブン・シャハルそしてアルアーイルとアッカにはアッターヒル・ブン・アビー・ハーラが、マアリブにはアブー・ムーサー・アルアシュアリー、またキンダにはジャード・ブン・ラビード・アルバヤーディーが、アッサカーシク（ジュンド地方）とアッスクーン（マーウィヤ地方）にはイカーシャ・ブン・サウルそしてムラードにはファルワ・ブン・マシーク等がいた。

アブハラ・ブン・カアブの動き

アブハラ・ブン・カアブ・ブン・アフ・アルウンシーが、彼の出身地ジャウフ東方のハッブ地方からヘジラ暦10年に反乱を起こした。彼は味方と共にナジュラーンに向かい、その総督であるアマル・ブン・ハザム・アルアンサーリーを彼の地より追い出した。また同様に彼に従っていた者達の内カイス・ブン・アブド・ヤグース・ブン・マシューフ・アルムラーディーが、彼の一族郎党と共にムラードに向かい、その総督であるファルワ・ブン・マシーク・アルムラーディーを追い出した。

それからアブハラはサヌアーへ向け前進を続け、その総督であるシャハル・ブン・バーザーンを殺害した。そしてサヌアー西郊外の諸部族の間で二手に分かれて起こった戦争の結果、サヌアーを手に入れた。そしてアブハラはシャハル・ブン・バーザーンの未亡人と結婚した。彼はサヌアーに留まり、アマル・ブン・マアディカルブ・アズバイディーをマズハジャの知事に任命した。これらの事件によりアブハラは手に負えなくなり、危険性が大きくなっていった。

一方聖なる預言者と言え、アブハラは彼のイスラーム世界からの離脱に直面して、イエメンの族長達やより広範囲の支配者達に書簡を送りアブハラを殺し、その運動を終わらせる様に命じた。

そしてアブハラに対する強大な反対運動が起こり、ズー・アルカッラーイ・アルヒムヤリーとアーミル・ブン・シャハル・アルハムダーニーとその他の者達はその運動の指導者となった。同様にカイス・ブン・アブド・ヤグース・ブン・マシューフ・アルムラーディーが聖なる使徒の書簡を聴いた後にその反対運動に参画した(注:7)。この人物はアブハラの子となつたシャハル・ブン・バーザーンの未亡人の協力であつたアブハラを彼の寝室において殺害する事に成功した。これは使徒の時代の最後に起こつた事件であつた。

(注:7) 「サヌアーの歴史」 P. 73

これによりイエメンにおけるアブハラの子は終わりを告げ、聖なる使徒は彼の殺害後、シャハル・ブン・バーザーンの後継者として、アッバーン・ブン・サイド・ブン・アルアースにサヌアー州を任せた。

しかしながらカイス・ブン・アブド・ヤグース・ブン・マシューフ・アルムラーディーが率いる反乱の新しい動きが復活した。それは初代カリフのアブー・バクル・アッシディークの時代であつた。このカイスをアルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーとアマル・ブン・マウディーカルブ・アズバイディーが援護した。

同様にイスラームからの離反(リッダ)や反乱が、アブー・バクル・アッシディークの時代の初めにイエメンの諸地域や或いはイエメンの地以外でも起こつた。これらの事態に対し

て、アブー・バクルは彼の篤い信仰心とエネルギー全てをもって立ち向かい、ついにそれら全てのことを終結させることが出来た。以上の事柄は今後我々が知るところとなろう。

4 人のカリフの時代におけるイエメン イスラームからのリッダ（離反） （ヘジラ暦11年—40年、西暦620年—661年）

聖なる使徒が神に召された後、アブー・バクル・アッシデークがカリフ（後継者）に任命された折、彼は使徒の（時代の）イエメン総督達をそのまま続けて任命した。

とはいえ、アブー・バクル統治の初期は、イスラーム諸州の方々で動揺が沸き起こった。イエメン国内も勿論のこと、幾つかの地域で蜂起が起こった。前出のアルハズラジーは彼の著書「鑄造された黄金」の第3章の冒頭で次ぎの様に要約している。

「アッラーの使徒が召された時、ハドラマウト、サヌアー、そしてティハーマの各部族の中には、イスラームに背教した者達がいた。アッラーの使徒の命を受け、当時の総督の職に就いていたのは、以下の顔ぶれである。即ちサヌアー州とその周辺地区：アッバーン・ブン・サイード・ブン・アルアース。そしてジュンド州とその周辺地区：ムアーズ・ブン・ジャバル・アルアンサーリー。ハドラマウト州及びその周辺地区：ズィヤード・ブン・ラビード・アルバヤーディーであった。アッラーの使徒はハドラマウトのキンダにアルムハージル・ブン・ウマウィーヤ・アルマハズーミーを用いた、と言われている。ところが赴任する前に、マディーナで病気になったので、アッラーの使徒はズィヤード・ブン・ラビード・アルバヤーディーにアルムハージルの職務を代行するように書簡を送った。

アッラーの使徒が召された時に、アブー・バクルはアルムハージルをその職務に据え、彼に対して、アッラーの使徒の命により総督の職にある他の者達と共にイエメンの背教者達と戦うように命じた。それでアルムハージルはイエメンに向かったのであるが、同行者にアブドルラハマーン・ブン・アルアースとジャリール・ブン・アブドッラー・アルバジュリーの2人が付き添って行った。

ナジュラーンに着いた時に、ムラード県出身の者達と共にファルワ・ブン・マシーク・アルムラーディがくわわった。アルムハージルは騎馬隊を二手に分け、そのうち一隊は手元に残し、他の一隊はアルムハージルの兄弟のアブドッラー・ブン・ウマイーヤが率いて、ティハーマ地方のイッカから北上してくる背教者等の謀反の鎮圧に向かわせた。

アルムハージル・ブン・ウマイーヤ・アルマハズーミーがサヌアー州に入った時、アブー・バクルに書簡を送り、帰郷の許可を求めた。また他の総督達も同様な許可を求めていた。そこでアブー・バクルは彼等に書簡を送り、こう伝えた。「アッラーの使徒は自らお命じにな

って、汝等を遣わされたのだ。汝等の中で、もしアッラーの使徒がお命じになった事は達成したので帰郷したい、と思う者が居れば、その者は帰郷するが良からう。だが代わりに務めを果たしたい、と望む者をその者の後任に選ばねばならぬ。もしその任に留まりたいと望む者はその俣で良い」。

そこでムアーズは自分の後任に、かの有名な恋愛詩人のウマル・ブン・アビーラビーアの父、アブドッラー・ブン・アビーラビーア・アルマフズーミーを選んだ。アッバーン・ブン・サイード・ブン・アルアースは後任に、ヌーフイル・ブン・アブド・マナーフの一族の同盟者ヤアリー・ブン・ウマイーヤ・アッタミーミーを選出した。アブー・バクルはアブドッラー・ブン・アビーラビーア・アルマフズーミーをジュンド州とその周辺地区の総督に、そしてヤアリー・ブン・ウマイーヤ・アッタミーミーをサヌアー州とその周辺の総督にそれぞれ任命した。

アブー・バクルは敵対行為が広がっていった全地域の反乱の揺籃期において、それを根絶やしにする準備をしていた。次ぎの様な言葉が繰り返されたと伝えられている。「神かけて、もし彼等が私にイカールで駱駝の足を縛る事を禁じるならば、駱駝に乗って私は彼等と戦うであろう」。

そしてイエメンにおける背教や反乱の動きを根絶やしにする為に、カリフのアブー・バクルが彼の下に召集した者の中には、我々が知っている通り、アルムハージル・ブン・ウマイーヤ・アルマフズーミーとその他の者達がいた。この人物は手元に保持していた一隊と共にサヌアーに到着した。そしてその住民が沈静化したことに安心して、彼がアブー・バクルに宛てその旨を伝える手紙を書いたところ、アブー・バクルは彼に対して、ハドラマウトへ彼の軍隊と共に進軍せよ、との命令を与えた。

アクラマ・ブン・アビー・ジャハルが自らの一族郎党と共に彼に加わり、そこで彼はハドラマウトのキンダを目指して進んだ。ズィヤード・ブン・ラビード・アルバヤーディーの書簡がその様に促したからであるが、その書簡で彼（ズィヤード）は、彼とキンダで蜂起した者達の間で起きている事について説明したのであった。そして彼等の頭目は、アルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーであった。

アルアシュアスは軍団長として、アルムハージルが到着した事を知ると、彼の信奉者達の中の幹部達と共に、キンダ地方のアルヌジャイラ城へ避難した。そこでアルムハージルはそこに彼等を包囲し、ついに彼等に降伏を余儀無くさせた。そして彼等の多くの者を殺し、或いは捕らえたが、アルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーは除かれていた。と言うのは彼が、自分自身とその信奉者達のうち、9人の者の身の安全を要求し、アルムハージルが彼等に対して保障を与えたからであった。

アルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーにとって望み通りの事が行われた際に、前述の城の中で包囲されていた者達の中の1人、マアダーン・ブン・アルアスワドと言う者

が立ち上がり、安全を保障された者達の中の1人に自分も加えてくれるようにアルアシュアスに要求した。しかしアルムハージルは、マアダーンの名前をアルアシュアスの名の所に置く事(名を入れ替えること)しか出来なかったのか、或いはアルアシュアスが(安全を保障された者達の)リストの中に彼の名前を入れ忘れた等、諸物語に異説がある。

アルムハージルはアルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーを拘束し、カリフのアブー・バクルの下に送った。幾つかの伝承に拠れば、カリフはアルアシュアスの非を問い質し、判決を申し渡している。

また更にアルムハージルは、反乱軍の首謀者に名前を連ねているカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーとアマル・ブン・マアディーカルブ・アッドズバイディーの両名をカリフのアブー・バクル・アッシディーク(神が彼を嘉し給わんことを)の下に送っている。カリフは両名の非を問い質した後、同様に赦免し帰郷させている。

ところでこの両名は身の安全を願い出ることも無く、自分達の方からアルムハージルの下へ投降したのである。アルムハージルがイエメンに赴任して来て、未だ日が浅い頃ナジュラーンを訪れた直後のことであった。

続けてアルムハージルは、イエメン人のみならず、他の将校、将軍達と一緒に、イエメン内の動乱が勃発した地域に聖戦を挑んだ。結果的に反乱を収め、抵抗運動を根絶やしにしたのであった。同様の事はイスラーム共同体全土において成し遂げられた。ひとえにカリフであるアブー・バクルの堅固な意志力と篤い信仰心、それに溢れる活力のお陰によるものであった。

カリフのアブー・バクルはアルアシュアス・ブン・カイスを赦免すると共に、彼に彼の妻であり、カリフのアブー・バクル自身の姉妹でもあるウンム・ファルワを返してやっている。ファルワが嫁いだのは、聖なる使徒が未だ存命の時、アルアシュアスが初めてマディーナにやって来た時のことであった。

後に、アルアシュアスはイスラームによる解放(征服)に多大な貢献をし、その折、自らの勇気を示す事になる。アルアシュアスは従って、イスラーム史を扱った書物の中で有名である。彼の他にイエメン人の将校や将軍達もアルアシュアス同様勲功を立てている。その中には、アマル・ブン・マアディーカルブ・アッドズバイディーやカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーがいる。この事は、カリフのアブー・バクルが、両名と他の将軍達の一部を赦免した後のことであった。

イスラームから離脱したイエメン人達が、イスラームの小集団に戻って来るに伴い、イエメンに統一が戻った。そしてイエメン人達はカリフであるアブー・バクルの呼び掛けに応じた。その呼び掛けとは、聖なる使徒の教友であり、執事であったウンス・ブン・マーリクを通じて、イスラーム教を広く布教し、アッラーの聖戦の為に、イエメン人達に向けられたものであった。

イエメン人達は、一族郎党を引き連れて、全財産を持って、アブー・バクルの所にやって来た。それは丁度、彼等が同じ目的で2代目のカリフであるオマル・ブン・ハッターブの呼び掛けに応

じた如きものであった。その事については我々が知るであろう様に、世界中至る所でイスラームの流布を行う事において、大いなる参画を成すのである。

その件は、既にダミーリーが彼の教訓詩において、アルアシュアス・ブン・カイスが開いた宴会の催しについて示唆していた。その宴とは、カリフのアブー・バクルがアルアシュアスに彼の妻ウンム・ファルワを戻したときに催されたものである。

カイスの息子アルアシュアスの宴、既にそこには非の打ち所の無い現しみがおわします
アルアシュアスは宴で最も果報者、何故ならアブー・バクルが彼に高貴なる女を与え給うから
彼は宴で、マディーナで最も祝福されたもの、その全てを高額なる金で買い取りし
饗宴に來訪し者、町に住み着きし者、元々祖国を持たなき者を満腹させ給う

そして聖なる使徒の生存中に始まったアブハラ・ブン・カアブの運動、そしてそれに続いた運動は、前者の延長と見なされているのであるが、カイス・ブン・マクシューフ・アルムラーデーの運動、そしてこの両者の運動を支援した者達、そしてアルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーやアマル・ブン・マアディーカルブ・アッドズバイディーとムアーウィア・ブン・カイス・アルジャンビーやヤジード・ブン・ムハッラム、またヤジード・ブン・ハシーン・アルハーリシーとヤジード・ブン・アルアフカル・アルアズディーなど、彼等以外にも蜂起した者達の運動は、イスラームに対するリッダ（離反）ではない、と主張している現代の研究者達がいる。即ち彼等の運動とは継ぎの様なものであった。

1ーバーザーン・ブン・アッティジャンや彼の息子のシャハルを首長とするイスラーム初期のペルシャ人、もしくはペルシャ系の出自の者に統治が戻される事に対するイエメン人達の不満を表明しての事であった。イエメン人達はイスラームに対して、他のイスラーム諸州の多くで成されていた様に、自らの手による統治を熱望していたのである。

2ーイエメン人達以外の統治者達にザカート（強制喜捨）を渡す事の拒否による。この論拠は、蜂起したイエメン人の指導者達が、それに関するシャリーア（イスラーム法）に則り、イエメン人達の富裕者達からそれを徴収し、貧民達に還元していた事を基盤にしてのことであった。

上記の意見を述べている研究者達の中に、ナッザール・アブドラティーフ・アルハディーシー博士がいるが、彼は自らの著書「イスラーム初期のイエメンの人々」の中で次ぎの様に述べている。（注：8）「イスラーム以前のイエメンの政治状況から次の事が明らかになっている。アブハラ運動はその初期においてイスラームや使途の政策に向けられたものではなかった。即ちその運動を率いた諸集団は、サーサーン朝のペルシャ人達や彼等の同盟者であったハムダーン族と争っていたのであった。」

（注：8） 「イスラーム初期のイエメンの人々」 P. 113

彼以外の研究者達（注：9）もアブハラがアルジュンドにおける聖なる使徒の総督であるムアーズに宛てた書簡によって、彼等が主張している事柄を証明している。その書簡中の彼の言葉は次の通りである。「やあ、移入して来た人々よ、我々の土地から得たものを保持しなさい。そして貴方達が集めたものを豊かにしなさい。我々はそれに対してより相応しい者であるが、今は貴方達が存在しているものの上にいるがいい。」

（注：9）「アッタブリーの歴史」第3巻、P. 229

アブハラ・ブン・カアブが殺された後に、カイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーが運動を引き継いだ時、ズー・アルカッターウ・アルヒムヤリーに宛てた書簡によると、彼の言葉はこうであった。（注：10）「ペルシャ人達は貴方の国ではよそ者であり、貴方達の上の重荷である。もし彼等を放置しておいたならば、彼等は貴方達の上に絶える事はないであろう。私は貴方達が彼等の首領を殺し、我々の国から彼等を追放した方が良い、と考えている」。

（注：10）「イスラーム以前のアラビア人達の歴史詳説」第4巻、P. 193

カイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーがズー・アルカッターウ・アルヒムヤリーに対して、対ペルシャ人の支援を要請したが、ズー・アルカッターウ・アルヒムヤリーはカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーが要請した支援を断り、返事の中でこのように語っている。「我々はこの地の出自の者では全く無い。貴方こそが彼等の仲間であり、彼等は貴方の仲間ではないか。」

ズー・アルカッターウ・アルヒムヤリーがカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーに宛てた手紙は、カリフのアブー・バクルがズー・アルカッターウ・アルヒムヤリー自身に宛てた手紙と同じようなものであった。その手紙の中でカリフのアブー・バクルはこう書いている。

（注：11）「ペルシャ人達に敵対行為を宣言した者達に対峙し、彼等を支援し、彼等を守り、フェイルーズに耳を傾けさせ、彼と共に勤しむようにさせよ。私は既に彼に一任している。」

（注：11）「アッタブリーの歴史」第3巻、P. 536

ジャウワード・アリー博士は次ぎの様に引用している（注：12）。カリフのアブー・バクルは、ウメール・ズー・マラーンやスマイフィウ・ズー・アルカッターウやそれ以外の人で、彼がイスラームを保持し、カイスや離反者達に抵抗するように命じた人々と書簡を遣り取りした。

（注：12）「イスラーム以前のアラビア人達の歴史詳説」第4巻、P. 193

それに対してカイスは「ファーッラ」と呼ばれたラヘージュの逃亡集団（彼等はかつてアブハラの子孫であった）と書簡の遣り取りをした。この集団はアブハラの子孫の死後、サヌア

ーから逃げて行き、放浪生活を始めていた。山へ上り、戦闘集団として彼等と意を異にする者全てを狙い撃ちし始めた。カイスは彼等に対して、急いで彼の元に来ること、それからカイスの成す事と彼等が成そうとする事が一つになるよう命じたが、それはイエメンからペルシャ系の人々を追放するために集合する事であった。

ジャウワード・アリー博士は次ぎの様に付け加えている。「彼等はカイスに呼応し、サヌアーに近づいた。カイスはファイルーズとダーザワイヒとジャシーシュ及びペルシャ系の他の人々全てを暗殺する策略を巡らし、カイスはダーザワイヒを捕らえて殺害した。ファイルーズとジャシーシュはその陰謀に勘付き、ハウラーンへと逃亡した。そのハウラーンの人々はファイルーズの親族であった。ファイルーズはハウラーンの人々と共に抵抗を止めず、カイスはサヌアーで反乱を起こした。」

カイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーはアブハラ・ブン・カアブを滅ぼすことで、ペルシャ系の人々と相互協力したが、その後反ペルシャ系に転じたようである。理由はアブハラの後継者になる事で、その統治において、カイスが待ち望んでいた支援も協力も彼等（ペルシャ人）から見出せなかったからである。

カイスはイエメンから海路ペルシャ系の人々を追放してしまった。つまり彼等はアデンからペルシャに運ばれたのであった。また陸路でも同様であった。彼はその時全員に対してこう言ったのであった。「元々のペルシャの一族にくっ付いている！」

聖なる使徒の末期と初代カリフのアブー・バクル時代の初期におけるイエメン人指導者達の行動が何であれ、それはイスラーム国家とその統一からの離反であると考えられた。同様にイエメン以外の他の国でのイエメン人以外の指導者達の行動についても、その様に考察された。

従って、聖なる預言者は晩年、ペルシャ系のワブル・ブン・ヤフニスをイエメンのペルシャ系指導者達、ファイルーズ・アッダイラミーとダーザワイヒ・アルアスター、そしてジャシーシュ・アダイラミーの元、へ派遣した。同様にジャリール・ブン・。アブドッラー・アルバジュリーをズー・アルカッターウ・アルヒムヤリーの元へアブハラ・ブン・カアブを滅ぼそう、と呼び掛けて派遣した。そして聖なる使徒の末期にカアブは殺された。（注：13）

（注：13） 「アッタブリーの歴史」第3巻、P. 187/P. 227

そしてタブリーは彼の歴史書の中でこう付け加えている（注：14）「陰謀者達がアルアスワド・アルウンシー（アブハラ・ブン・カアブ）の殺害を彼の寝室において決行した時、ダーザワイヒはその朝、陰謀者達の一人を彼等の支援者達と示し合わせたサインで呼んだ。アブハラは護衛が陰謀者達を取り囲んだ時、彼はアブラハの首を護衛に向かって投げつけた。そして支援者達が集合し、奇妙な追撃が始まった。護衛達はペルシャ人の家族を（人質に）奪い去り、ペルシャ人達とその支援者達は護衛達を捕虜にした。それから両者は人質と捕虜を解放すること、そしてアスワド（アブハラ）に従った人々がサヌアーから出て行くことで合意した。彼等はその後、何等得

るところも無く、山岳地帯に上り、人々を付けねらう事を繰り返す事になる。そしてそれはペルシャ人達と戦い、彼等をイエメンから追い出すために参加せよ、と言う書簡をカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーが送るまで続いた。そしてアブハラ護衛達と言うのは、前述した様にアルファール（ラヘージュの逃亡集団）として知られた。

(注：14) 「アッタブリーの歴史」第3巻、P.239

そしてカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディーはカリフのアブー・バクルの時代に初めて、新たな謀反の運動を始めた。その運動にはアルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーやアマル・ブン・マアディーカルブ・アッドズバイディーや前に述べた彼等以外の人々がカイスを頼った。

しかしアブー・バクルはその事件やそれ以外のものに立ち向かい、心を強く持ち、信仰心の深さと彼のバイタリティに拠って、イスラーム諸州全域における謀反の動きを取り除いていった。そしてそれをとうとう全て終結させる事が出来た。

イエメンにおける謀反の運動を終結させることにおいて彼を助けたのは、謀反の運動をしていた反乱者達に同意しなかったイエメン人達であった。彼等はアッスマイフィウ・ジー・アルカッターウ・アルヒムヤリーやシャハル・ブン・アーミル・アルハムダーニーやその他の者達であった。

アッスマイフィウ・ジー・アルカッターウ・アルヒムヤリーが、真理（イスラーム）への支援を促しながら、彼の部族達に宛てた書簡にはこんな言葉がある（注：15）。「人々よ、お前達にはアッラーの慈悲と祝福が与えられ、お前達の中に（アッラーは）預言者を送り給い、クルアーンを啓示なされた。そして彼は神の御心を伝える事を上手くおやりになられ、お前達に正しい道を歩む事を教え、お前達の知らなかった事を教えることに依って、曲がった道を行く事を禁じ、お前達の望まなかったものに関して、お前達が善行に引き付けられる事を望まれた。そしてお前達に対してお前達の善良な同胞達が、多神教徒達とのジハードに赴いて、大きな報酬を得るように、と呼び掛けた。であるから我々と一緒に今、兵役に就きたいと望むものは誰でも、兵役に就かせしめよ。最後の審判の時は我（神）と共にあり」。

(注：15) 「イエメン・イスラーム史」P.65

かくしてサヌア郊外でジー・アルカッターウ及び彼の部族とカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディー及び彼の従者達との間に戦闘が起こった。そしてカイス・ブン・マクシューフは敗れ、従者達共々サヌアとナジュラーンの間を放浪する事になった。

そしてハズラジーは彼の歴史書の中でこう記述している。「カイス・ブン・マクシューフとアマル・ブン・マアディーカルブ・アッドズバイディーがアルムハージル・ブン・ウマウィーヤ・アルマハズーミー（この男はカリフのアブー・バクルがイエメン人達を善行に戻すために

イエメンに送ったカリフの代理人であった)の所にやって来た。そして2人は降伏し、命の保障もないのに、自分達の身柄を引き渡した。するとムハージルは彼等に身の保障を与え、2人をアブー・バクルの元に送った。一方アブー・バクルは彼等を鞭打ち刑に処し、その後止血を行った。そして彼等に留まるように求め、彼等を部族の元に戻した。その後二人のイスラームへの信仰は善くなり、イエメン人達の他の指導者達と共に、我々が知っているイスラーム征服運動に参加したのであった。

たとえアブラハ・ブン・カアブやカイス・ブン・マクシューフの運動が失敗であったとしても(注:16)、それらはイエメン国内にいるペルシャ系の人々の諸拠点を弱体化させる事に成功した。またカイスの運動でペルシャ系の一般の人々を彼等の国ペルシャに追放する事が出来た。この2運動は正統カリフ達のペルシャ系の人々に対する立場を修正するのに役立ち、以降カリフ達はペルシャ系の人々には地位を与えずに、イエメンの諸部族長達との関係を強固にした。初代カリフのアブー・バクルは、何か不幸がある度に彼等に声を掛け、彼の時代に、またこれから見ていく様に、第2代カリフである信者達の長オマル・ブン・アルハッターブの時代に、イエメン人達は勝利の先駆者となった。

(注:16) 「アルミスバーハ(ランプ)」誌、第6号に掲載された「民衆の激しい戦い」と題するアリー・ブン・アリー・サブラ教授の論文

最早イエメンでペルシャ系の人を高位で任命した者はムアーウィヤ・ブン・スフィヤーン以外にはいなかった。彼はイエメンの地をファイルーズ・アッダイラミーとその息子のアッダハーク・ブン・ファイルーズに任せている。だがイエメンの族長達や有力者達の殆どが、イスラームの征服と拡張以来イエメン国外のシャーム(大シリア地方)やイラク、エジプトその他の地域で独立していたのであった。これは恐らく第4代カリフのアリーのイエメン総督が、バサル・ブン・アルターに対峙する際の支援をファイルーズに求めたのに対して、ファイルーズが次ぎの様な返答した事をムアーウィヤが評価してのことであろう。「ここに戦い等は無い。これからお分かりになられるであろうが、御自身の身に気をつけられよ」。

「イエメン概説史」第2巻[イスラーム史] P21-36